

種移行への期待が大きいことが感じられた。その一番手としてマダイがあげられ、その生産量は約1万t(昭和53年)に達し、今後も増加すると思われる傾向にある。

マダイの種苗生産技術はほぼ完成されその生産量もかなり増加しているが聞き取り調査によれば、現在なお、養殖用種苗の大半は天然種苗に依っている。ブリの例もある様に今後天然種苗に依存することは困難になることが予想されるため、人工種苗の増産が必要であると思われた。

表1. 海産魚類の養殖生産量

(単位:t)

年次 (昭和)	計	※ まあじ	ぶり類	※ まだい	※ ちだい	※ くろたい	※ しまあじ	ぼら類	ふぐ類	かわはぎ	その他の 魚類
43	32,194	—	31,777	—	—	—	—	—	63	—	354
44	33,146	—	32,613	—	—	—	—	—	52	—	481
45	43,910	2	43,300	460	5	2	36	—	26	63	16
46	62,921	24	61,743	971	23	1	43	—	21	44	41
47	78,723	112	76,913	1,298	95	13	15	—	15	149	113
48	83,769	348	80,269	2,606	58	9	30	—	17	253	179
49	97,084	628	92,685	3,414	85	4	48	2	8	51	158
50	97,997	923	92,352	4,303	126	6	22	1	11	17	236
51	109,257	721	101,619	6,453	125	61	69	1	11	10	187
52	124,510	772	114,866	8,120	193	67	136	2	18	34	302
53	135,008	815	121,728	10,844	532	112	181	—	48	28	702

注 ※は44年まで「その他の魚類」に含む

(漁業養殖業生産統計年報)

マダイ人工種苗の価格は全長50~80mmサイズで80~100円であり、早期に生産されたもの程、高価格(広島県)の傾向にあった。本県においては恵まれた自然条件から加温施設がなくても早期採卵、早期種苗生産が可能であるため、種苗輸送という問題点はあるもののマダイの種苗生産は事業としてなりたつものと思われ、さらに早期種苗による年内出荷という新たな養殖形態がでてくればその需要は更に増加するものと予想された。

その他今後、養殖用種苗として要望されたもの、あるいは新魚種として可能性があるものはハタ類、シマアジ、カンパチ等の魚種があげられた。

## II 早期種苗生産試験

本土への早期種苗供給を前提とした場合、現段階においてはマダイが中心になるべきものであるが本県沿岸にはマダイが生息しないため、今年度は他府県からマダイ稚魚を移殖し、屋外の大型水槽と海面の小割生簀において、本県でもマダイが生息可能か、成魚までに成長し成熟産卵まで至るかどうかに関して吟味するため現在養成中である。

現時点で早期に採卵が可能な魚種としてミナミクロダイがあるが本土市場においても市場性が充分あるものと推定し、種苗生産試験、中間育成、輸送試験等をこの魚種を中心に実施した。